

<書評>

Yukimasa Nagayasu, "Re-Examination of Trans-National
Integration: With Special Reference to Asian Region,"
Reitaku International Journal of Economic Studies,
Vol. 2, No. 2, September 1994.隅谷三喜男『アジアの問いかけと日本—あなたはどこにいるか—』
聖学院大学出版会、1994年

松 岡 紘 一

社会科学の議論は、少なくとも10年を経てその正否が明かとなる。評者は、「あなたはどこにいるか」そして「あなたは何を見るか」と読者に問いかけた隅谷三喜男著『アジアの問いかけと日本—あなたはどこにいるか』が出版されるやこれを直ちに入手し、読み始めるととにかく面白くて一気に読み終え、少なからず衝撃を受けた者の一人である。われわれは流れる歴史の上に立ち、歴史を学びながら、今歴史を創りつつある存在である。そして、歴史は二度と戻らないがゆえに、まさに隅谷三喜男氏（1916-2003）の言うように、「あなたはどこにいるか」「あなたは何を見るか」との自己への問いかけは、痛く心に響いてくるものである。われわれは悲しいかな容易に「合理的な愚か者」（A・セン）に陥りやすく、しかも、事後の反省は多くの場合「後の祭り」である。過ちなき道を歩むためにも自己へのこの問いかけは、いつの場合でも必要なことであろう。心に深く銘記したいものである。その本の内容は概略次の通りである。

今、アジアの民衆は伝統的な支配層が「開発を強力に推進してゆく力」として「開発独裁」をすすめ、その結果、民衆は抑圧され収奪されており、必ずしも民衆の貧困の解放に結びついていない。これが「アジア開発の状況」である（同書、60頁）。そのアジアから「アジアと、アジアの民衆と協力していく道はどこにあるのか」（同書、38頁）を探り、さらには分配の公正や社会正義などの価値観を日本を含めアジアの多くの人々と、どのように共有しあえるか、などの大きな問いかけがなされている（同書、65頁）。その意味で近代日本においてアジアを問うことは日本を問うことでもあり、ぴったりと寄り添う一体不可分の関係・メビウスの帯（輪）の関係にあり、その関係は今後共急速に強まるであろう。

一方、評者は永安幸正麗澤大学教授の表記の論文を幾度も読み返しながら、隅谷三喜男氏の上記の問いに対して見事な解答を提供している、との想いをますます深くしたのである。そこに今回、永安氏のアジア地域統合論を取り上げる理由がある。

全部で6章からなり、その第1章はグローバル経済化のプロセスにおける対立する傾向について、第2章は我々の地球の新しいイメージについて、第3はアジア地域を創る歴史

過程とその背景、第4章はアジア地域統合のための提言、第5章はアジアにおける現在の統合のプロセス、第6章は地域統合の指導原理（多重層的視点と統合へのアプローチ）、となっている。全章を横断していえば次の通りである。

世界経済は国際貿易、外国投資、情報ネットワーク、地球環境などの問題からみれば、ボーダーレス化の傾向にある一方で、民族主義の新しい波が起きボーダーフルの世界に向かう傾向もみられる。まさに統合と分裂の同時現象が起きている。しかも、人間の活動には時間と空間に制約がある。スケールメリットを求めて国境の壁を越えるトランスナショナルな地域統合の動きにも、人間の一日の行動範囲が地球規模ではなく“地域”規模であることの制約がかかる。すなわち、コンピューターは自動的に24時間働くことができるが、人間は1日8時間しか働けない。しかも、実際の労働時間は地球の自転に従わねばならず、同時間スケジュールで、ヨーロッパ、アメリカ、アジアで働くことは非常に困難なことである。このことから、情報ネットワークのグローバル化に情報地理学の必然性が生じる。

人間世界のダイナミックスは安全保障、価値（宗教・イデオロギーなど）、経済、政治の4要因によって決められているが、それら各要因には必然的に矛盾する傾向がある。すなわち、安全保障の問題には集団安全保障システムの方向に向かいつつ、それぞれの国で自己防衛システムを持つことを強く望んでいたり、価値システムでは、人権のような普遍的価値や市場ルール、環境保護などは全世界に流布しているが、いくつかの原理主義は自らの独自の価値を現在社会に普及させようとしている。また経済は外国市場をめざして経済の規模を拡大させながらも、地方の環境や土着文化を守るためヴァナキュラーな、あるいは地場の経済が重要であるとの認識が生じる。政治はこれら3つの相矛盾する要因と対抗する力を示さなければならない。

将来は現在から、現在は過去からの継続であることから、アジアの将来を考えるために過去の確認作業が必要である。アジアは歴史的に西欧帝国主義勢力による一種の共有且つ自由な牧草地であったがゆえに、地域としてのアジアの構造は近代的な西洋によって導かれた受身的な産物である。アジアの地域はヒンズー教、仏教、儒教、その他の土着的宗教・土着的教義までに及ぶほど多宗教環境の多重層価値システムを持っており、政治的イデオロギーにしても多様化している。

アジア大陸は巨大な人口を持ち、豊かな人的資源を基本的に持っている。しかし、経済発展の異なるレベルと宗教上も民族上も多様性があるから、適切な世界市場経済システムの推進と文化の多様性とを統合していく新しい道を探らなければならない。アジアの発展は日本からの資本投資なくしては不可能であり、この地域での共通の利益追求のための経済統合推進には重要な役割を果たすことは明らかである。さらに、アジア統合にはインド亜大陸も含まれる。その理由は、インドと南アジア地域が民族の移住と貿易で歴史的に密接な関係があったことからである。

トランスナショナルな統合は排他的・敵対的な民族主義や地域主義をとるのでなく文化の多様性の上に合理的な共通認識、すなわち、国家を越えても同じルールで非メンバー諸国にもオープンな国家主権の相対化・相互主義をめざしたものでなければならない。

評者は本論文を読み返しながらかのアジアの経済を考え、さらに、先月（4月）本学において、幸いにも、アメリカの東アジア研究の権威・カリフォルニア大学名誉教授スカラピー

ノ氏の講演「朝鮮半島をめぐる平和と安定を求めて」を聞き、またスカラピーノ氏との個人的な質疑応答の機会に接して多くの示唆を得た。北東アジア経済圏は日本とロシアとの間に北方4島の問題や日本と北朝鮮との間に国交がなく日本人拉致問題などの事情もあり、北東アジア経済圏において本格的に経済交流を推進したり、経済協力体制を創設することは容易ではない。したがって、長い時間をかけながらヒトの交流を積極的に進め、相互理解を深め長期的視点での経済発展を求めざるを得ないであろう。

尚、評者が北東アジア経済に関心を持つようになったきっかけの一つを付記しておきたい。モンゴル・ウランバートル市で「第7回北東アジア経済フォーラム」(1997年8月19～21日)が盛大に開かれた際、評者は経済学者金森久雄氏と共に参加し、続いて翌年(98年)、中国吉林省延辺朝鮮族自治州(琿春)で開催された「国際ビジネス投資フォーラム」(9月21～23日)に参加することが出来た。その参加者のなかで約20名の北朝鮮視察団が結成され、メンバーに加えていただいた。その視察団は中国・延吉よりバスでロシア、中国、北朝鮮の国境を流れる豆満江に沿って下り「圏河」に着き、そこから中国・北朝鮮間の国境に架かる“圏河橋”(1943年日本人が建設したとガイド説明)を渡り、北朝鮮の「元汀」から「自由経済貿易特区羅津・先鋒」に入り、主として、同特区内の海産物加工工場(2～3の建物)を視察することが出来た。しかし、海産物加工工場として稼働している様子はなく、7～8名がパンを製造していたことが印象深かった。

(MATSUOKA Koichi)